

ネットワークの第一歩

—大分における「つどい」のとりくみと今後の課題—

高野 修（大分県／自交総連大分地連委員長）

1994年の暮れの12月21日の夜、大分市のコンパルホール304号室には、ほぼ満員の46名が参集しました。

ここで催されたのは、「『働きがいと協同』の学習会実行委員会」主催の、「講演と話し合いのつどい」でした。

協同総研理事長の黒川俊雄先生が大分に来られることを聞いた私たちが、阿部誠先生（大分大学）などと準備に当たってきました。

「つどい」の目標としては、「①労働運動や協同組合運動の現状（特に労働者協同組合の運動が広がっていること）を学び、②各組織や団体でとりくんでいる現状や実態を知り合い、展望について語り合う」を掲げました。

年末ということもあって十分なとり組みとはなりませんでしたが、協同組合やそれに関係している人達、労働組合の役員・活動家の方々、共同作業所や共同保育所など自ら経営に携わっている方々などに呼びかけることにしました。

34の団体や個人に対して案内状や案内ピラを郵送し、面談申し入れを行い、新聞に折り込みを入れたりした結果、前述したように労働組合、医療生協、法律事務所など17団体46名が集まってくれたのでした。

「つどい」では、黒川先生から「労働運動の現状とこれからの協同組合運動」と題する講演がありました。

黒川先生は軍隊での経験、戦後の大きな労働争議の経験、オイルショック後の解雇攻撃への争議団を中心とする闘いの経験など、自身が関わって来られた経験からの教訓から、「指令と動員型」労働組合運動の問題点や地域に密着した労働運動の必要性、「二枚腰の闘い」の重要さなどを分かりやすく説明されました。

同時に、90年代不況と財界の21世紀戦略の分析

を通して、地域を作り直すことによるのみ、産業構造の転換につながり得ることを明らかにされ、「易しいことではないが発想の転換を図ってとりくむことが大切」であり、「労働組合がワーカーズコープのような事業をやっていくことは、新しい運動のあり方として大切なことではないか」と、仕事起こしの必要性・重要性について指摘されました。

講演の後の報告は、労働組合自主経営会社として満10年を迎えたセキタクシー、国鉄からの解雇攻撃と闘っている「NRUサービス」、住民の健康を守って活動している医療生協、失業者に日々接し援助している職業安定所のなかまなどから行われ、「原点に戻って、自分達のやっていることが協同組合の運動だという点を見つめ直し、力を入れていきたい」とか、「運動と事業（仕事）のかねあいに頭を痛めている」とか、「もっと周囲の人達に、自分達のやっていることを知ってもらう必要がある」ことなどが率直に出されました。

その後、参加した方々から色々な感想や意見が寄せられています。

「『二枚腰』という考え方に共鳴した」「『事業を起こす』ことは大切なことは理解できるが、自分たちがやるとなると大変すぎて踏み出せない気がする」「事業として成功している全国の例をもっと知りたい気がする」「労働者協同組合というものを全く知らなかった。学んでみたい」など、労働者協同組合に対する関心が広がつつあることを実感しています。

主催した私たちは、「つどい」をネットワークの第一歩と考え、こうした関心を背景に「協同を考える研究会（仮称）」をできるだけ早く発足させ、県下の実践家たちが日常的に集える場を作りたいものだと考えています。